研究タイトル　放課後児童クラブにおける児童の発達支援に関する研究

研究者名

中村学園大学　教育学部　教授　吉川　昌子
中村学園大学　教育学部　講師　重橋　史朗
中村学園大学　教育学部　講師　松藤　光生

研究期間

令和2年6月18日～令和3年3月31日

研究計画の内容

放課後児童クラブにおいて、発達障がい等により特別な配慮を要する児童の対応に苦慮している支援員の負担を軽減するとともに、入所児童全体の、より健全な保育環境を創出するために、①糸島市28ヵ所の放課後児童クラブを対象に子どもの実態に関するアンケート調査を実施する。その結果を踏まえ、②特に支援ニーズの高いクラブを選定し、訪問支援を行う。また③発達障がいの特性とその対応に関する研修会を開催するとともに、④それらの効果を検討する。さらに⑤支援にとって具体的な手引きとなるハンドブックを作成する。

研究成果

1. 特別な配慮を要する児童の対応に関する支援員の困難感の把握
2. 糸島市内の放課後児童クラブにおける特別な配慮を要する児童の実態把握
3. 糸島市放課後児童クラブ支援員を対象に、発達障がいの特性理解とその対応に関するオンライン研修会の実施、及びその効果に関する検討
4. 放課後児童クラブへの個別訪問及び事後ヒアリングの実施とその評価
5. 支援員のためのハンドブック作成　B5サイズ　33頁　300部

以上、本研究では糸島市放課後児童クラブの過半数で支援員が把握する要支援児童が認められ、比較的入所児童数の多いクラブのほうが、より高い困難感が示された。訪問支援・研修会は、ともに参加者の満足度が高く、その理由に「これまで対応に苦慮していた児童を個別に理解する視点及びその関わりの手だてが得られた」等が見られた。しかし2回のアンケート結果の比較では、研究開始当初からの支援員の困難感は全体的に減少していない。その要因として、研修会の開催がコロナ禍の影響で遅れたこと、訪問支援回数が大幅に制限されたことが考えられ、さらに継続的な支援が望まれる。以下に研究成果1～5の詳細を示す。

1. アンケート調査から捉えた放課後児童クラブの実態と特別な配慮を要する児童の支援に対する困難感

糸島市放課後児童クラブ28クラブの支援員を対象に「発達に偏りがある児童の支援に関するアンケート」調査を2020年6月と2021年2月の2度実施した。2回の調査共に、28クラブ全てから回答が得られ回収率は100%である。有効回答数は、1回目の調査が131件、2回目の調査が125件であった。

(1) 支援員の性別：女性124名、男性6名、無回答1名と女性が95%であった。

(2) 支援員の年齢：20歳～76歳（無回答2件）平均55.3歳であった。

(3) 支援員の役職：常勤職員42名、非常勤職員86名、無回答3名であった。

(4) 支援員の所持資格：放課後児童支援員が最も多く、49%が所持。その他は、保育士資格20%、幼稚園教諭19%であった。また30%は、無資格であった。

(5) 就業年数：1ヵ月～28年（無回答1件）で平均7.7年であった。

(6) 障がい児数、要支援児童数：支援員が診断のある障がい児数を１名以上と記入したクラブは、28クラブ中18クラブであった。また支援員が要支援児童数について1名以上と記入したクラブは、28クラブ中19クラブであった。

(7) クラブの児童数、支援員数：児童数は、平均49.1人（20人～100人）で支援員数は、平均3.9人（2人～8人）であった。支援員一人当たりの児童数については、平均12.6人（6.7人～16.3人）であった。

(8) 発達障がい児童対応困難感：発達障がい児童への対応困難感については、支援員の就業年数や所持している資格とは関係せず、児童クラブの入所児童数が多いほど、対応困難感が高い可能性が示された（図1-1）。その要因にはクラブの児童数が多いと発達障がい児だけに時間をかけて対応することが困難になることや子ども同士の相互作用が複雑になり、子どもが不安定になりやすいことの影響がある可能性が考えられた。

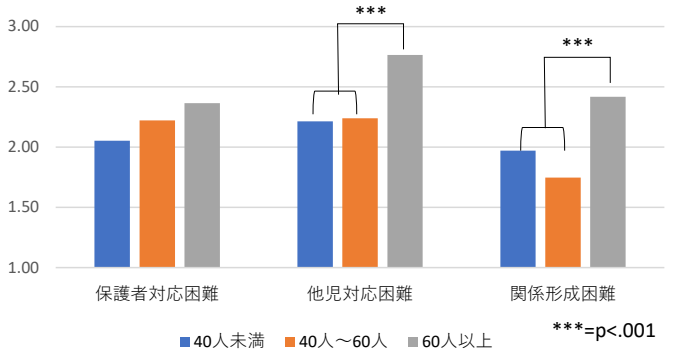

図1-1　児童数と対応困難感

また分析の結果、1回目と2回目の調査の間には、有意な差が認められなかった。これは、まず研修会の実施が2月末となったことが影響していると思われる。研修会を実施したすぐ後に2回目の調査を実施することとなったため、研修会を踏まえて児童と接する機会がほとんどなく、研修会を反映した結果とはならかなったことが推察される。加えて支援員の困難感の解消には、より回数を増やし継続した支援が必要になることが示されたとも考えられる。

2. 訪問調査およびアンケートからとらえた放課後児童クラブにおいて、特別な配慮を要する児童の実態

【はじめに】

放課後児童クラブ28ヵ所の支援員の困り感についてのアンケート調査結果より、困り感尺度の得点が高く、かつ困難な事例が多く報告された5カ所の放課後児童クラブへの訪問支援として「行動観察/聞き取り調査」と後日、主任指導員または主任指導員と支援員への「フィードバック」や「助言」を行った。

支援の依頼のあった「南風1及び２放課後児童クラブ」では、支援員らの事例の報告を元に「助言」等を行った。

□訪問支援1

図2－1

可也1放課後児童クラブ：児童数71名(2021.7.1)

7月29日(水)行動観察・聞き取り

7月30日(木)フィードバック・助言等

〈困り感・相談支援〉

・他児童とのトラブルで手が出る等の他害行為に困っている。

・集団でのルール等が守れない、集団での活動が困難等の相談。

□訪問支援2

図2－2

可也2放課後児童クラブ：児童数77名(2021.7.1)

〇7月29日(水)行動観察・聞き取り

〇7月30日(木)フィードバック・助言等

〈困り感・相談支援〉

・パニックや他児童への暴力、攻撃的な行動。

・孤立ではないが、ずっと一人で遊んでいて、他児童と関われない。

・不登校傾向の児童への対応について。

□訪問支援3

図2－3

前原南1放課後児童クラブ：児童数56名(2021.7.1)

8月5日(水)行動観察・聞き取り

8月20日(木)フィードバック・助言等

〈困り感・相談支援〉

・他児童に対して暴言や暴力ありルールを守れない、自分の非を認めない事で指導が困難である。

・不登校傾向の児童への対応について。

・不注意の傾向が強く、落ち着きがない。集団での行動が困難。

□訪問支援4

前原南2放課後児童クラブ：児童数57名(2021.7.1)
　8月5日(水)行動観察・聞き取り
　8月20日(木)フィードバック・助言等
〈困り感・相談支援〉
・他児童との関係がうまくできないためトラブル、他害行為が多い。
・集中が困難、不注意でじっとできない、片付けも難しいAD/HD傾向が強い。

図2－4

□訪問支援5

前原南3放課後児童クラブ：児童数56名(2021.7.1)
　8月5日(水)行動観察・聞き取り
　8月20日(木)フィードバック・助言等
〈困り感・相談支援〉
・気に入らないことがあると他害行為となる。
・パニックになると落ち着くまでに時間がかかる。
・他者の気持ちがわからない、思ったことを口にしてトラブルとなる。
・ゲーム等での勝敗にこだわり、ルールを守れないためトラブルになる。
・気持ちの切り替えが困難、学校でのイライラを持ち帰ってくる。
・自分の非を認めない児童が多い。身体接触が多い場合の対応に困っている。

図2－5

□訪問支援6

南風1及び2放課後児童クラブ：児童数33名(2021.7.1)
　11月16日(木)支援会議・助言等
　南風1、南風2合同で実施
〈困り感・相談支援〉
・対象児【気になる児童について】の事例検討を行う。
・同級生４年生男児４名で、トラブルやけんかとなることが多い。
・性的な言葉、表現が多く、対応に困っている。・吃音についての対応。

図2－6

【まとめ】

　放課後児童クラブ支援員らの困り感として児童の「他害行為（暴力・暴言）」等、行動面の問題や、保護者や学校との連携について等、いろいろな課題が浮かび上がった。また、「研修会の実施」、「巡回相談による助言」、「支援についてのハンドブック」等の要望が挙げられた。これら支援員からの報告や意見を参考に「放課後児童クラブ支援員のための児童サポートブック～特別な配慮を要する子どもの理解のために～」の作成を行った。

３．糸島市放課後児童クラブ支援員への、発達障がいの特性理解とその対応に関するオンライン研修会の実施とその評価

糸島市の小学校で相談支援に関わっている臨床心理士（図3-1）を講師に迎え、糸島市放課後児童クラブ全28施設の支援員を対象に、「発達障がい」の知識とその対応について理解を深めることを目的とした研修会を開催した。令和2年のコロナ感染状況を鑑み、予防対策の一貫でZoomによるオンライン開催とした。なおZoomは参加者の大半が今回初めての利用であったため、研修会以前の2月18日、22日の2日間にZoom動作確認の時間枠を設けた。さらに当日は研修会の始めにZoomの画面上の操作方法について説明を行った。オンライン研修の開催中、講師と参加者の応答を相互に視覚的に確認できるように、ビデオを両者ともオンに設定していた(図3-2）。

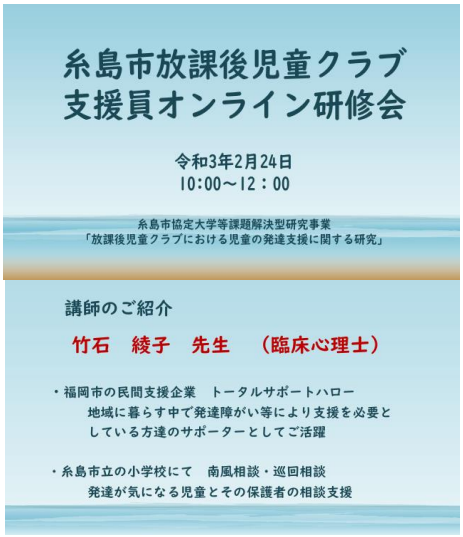

図3-1 オンライン研修会　講師紹介

図3-2 オンライン研修会のZoom画面

オンライン研修会後のアンケートでは、図3-3に示すように回答者全員から「満足」という評価が得られた。その理由として、「学年別の対応の仕方等がわかりやすく説明されていた」、「日頃から心配している児童にあった内容であり、対応等を再認識できた」、「糸島市内の小学校や児童クラブの話もあり、身近な出来事など共感できる事も多かった 」等の意見がよせられた。一方、オンライン形式については、「 途中で音が何度も切れ切れになり、聞きたい話がちゃんと聞けなかった」という接続上の問題もみられた。以上、研修内容には高い評価が得られたがオンライン形式には、その動作環境に課題も見られた。

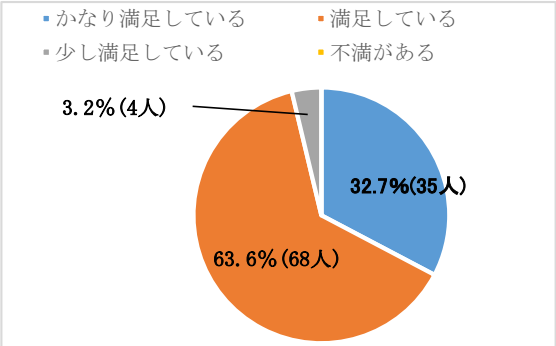

図3-3　研修会満足度（回答者数107）

４．放課後児童クラブへの個別訪問及び事後ヒアリングの実施とその評価

1回目のアンケートから、支援員の困難感が高いと認められた6児童クラブへの訪問支援とZoomによる事後ヒアリングについて、該当する支援員からは、2回目アンケートで図4-1、4-2に示すように、全員「役に立つ」という評価が得られた。

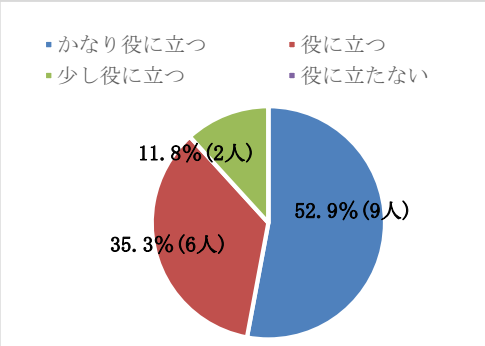

図4-1 訪問支援役立ち度（回答者数17）

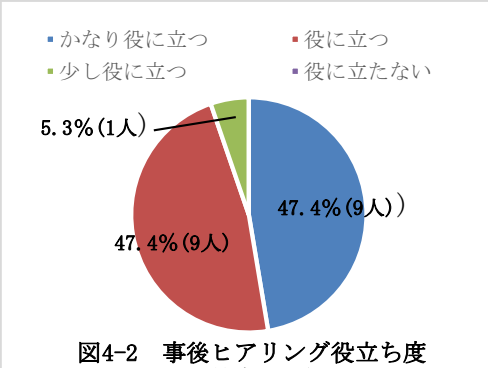

図4-2　事後ヒアリング役立ち度（回答者19人）

役に立った理由として、訪問支援では「実際に児童の様子を見た上で、支援を必要とする児童への対応について具体的なアドバイスがあった」、事後ヒアリングでは「児童の様子を支援員間で振り返り、成長した面、今後の対応の仕方などを確認しあうことができた」、「提案・助言するだけで終わらず、見届け確認、支援員の意欲付けまで行う支援であった」、「訪問支援後は、子どもたちのそれぞれ違う部分とよく見るようになったことにより、パニックになるのがなくなった」等が述べられていた。以上、個別の支援についていずれも高い評価が得られ、「可能であれば、定期訪問を希望する」という要望もみられた。

５．ハンドブックの作成

児童クラブに在籍する子どもの実態や支援員の聞き取りを踏まえて、求められる支援の手がかりを示すハンドブック「放課後児童クラブ支援員のための児童サポートブック　～特別な配慮を要する子どもの理解のために～」を作成し、発達障がいをはじめとする特別な配慮を必要とする子どもの特性と、その対応をＱ＆Ａ形式で示した。このハンドブックが、放課後児童クラブのよりよい保育環境をもたらす一助になるものと期待される。　以上

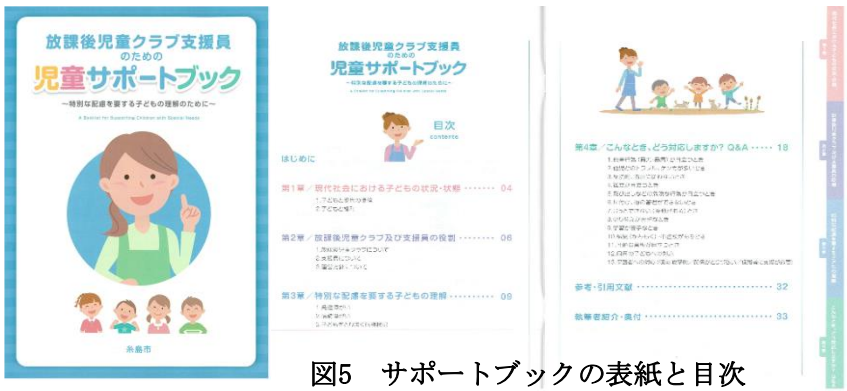

図5　サポートブックの表紙と目次